

# 第1回「東京会議」を振り返って

## 1. データから見た認知症の現状と支援の方向性（事務局）

- ① 何らかの認知症の症状がある高齢者は都内で約 23 万人(65 歳以上人口の約1割)
  - ② 認知症高齢者の半数以上は自宅で生活している一方、ひとり暮らしや夫婦のみの世帯が増加
  - ③ 認知症について、一般の人々の関心は高まっているが、理解の程度・内容は様々
- …等のデータを踏まえ、これからの支援の方向性について事務局の考えをご説明しました。

## 2. 認知症についての基本的理解と生活支援（斎藤正彦委員）

- ① 認知症は病気による症状であり、高齢期には誰にでもなる可能性がある。
- ② 認知症の症状が進行することで、様々な生活上の支障が出てくる。脳の損傷が直接影響して起こる「中核症状」と、環境や心理状況などが影響して起こる「周辺症状」があるが、周囲の配慮でカバーできることもたくさんある。
- ③ 認知症の人の支援では、失敗させない、恥をかかせない、不安にさせないことが大切。
- ④ 認知症になったことで最も苦しみ、悲しい思いをしているのは認知症のご本人であり、「私は忘れない」「ぼけてない」と言い張る人の心情に思いをいたすことが大切。

…等、認知症について私たちが知っておきたい事項を、わかりやすくご説明いただきました。

## 3. 認知症の家族との暮らしを振り返って（ゲストスピーカー・長谷川正氏）

- ① 認知症の人が地域でそれまでどおりの暮らしを続けるためには、ご近所や地域の人達の支えが必要。そのために、ご家族の状況を積極的に話し、理解を求めた。
- ② だれでもトイレは、認知症の人が外に出る際の大きな味方。また、ホテルや商店など、様々な場面で関わる人が認知症を理解し、温かく見守ってくれることが大きな力になる。
- ③ 認知症が重度になっても、感情は豊かに残っている。言葉は出なくても、わかっていることもたくさんある。

…等、体験に基づく貴重なお話から、地域で出来る支援についてのヒントをたくさんいただきました。

## 4. 認知症高齢者が地域で暮らすこととは（和田行男委員）

- ① 認知症になっても、地域の中で人と関わり合って生きていくのが人間の姿
- ② グループホームの利用者がまちに出ていくことで、地域の人達との人間関係が生まれ、様々な形で生活を応援してくれる人が増える。
- ③ 東京の町には、認知症の高齢者が人とつながって生きていくための力がたくさんある。

…等、グループホームでの支援を通じて、実際に認知症の人々が地域で暮らしていく姿をご紹介いただきました。

## 5. 認知症高齢者の生活に必要な支援について

基調講演や報告を通じて、認知症のことを身近なものと捉え、認知症高齢者の生活を支援するために、それぞれの立場でできることを考えていく必要性を確認。